

シンガポール共和国の小学校の現状視察

～特別支援教育の視点から～

Present Conditions Inspection of the Elementary School of the Republic of Singapore
～ from the View Point of Special Needs Education ～

鈴木誠司, 田村和之, 小澤大成, 沖津麻依, 砂川瑞紀

Seiji SUZUKI, Kazuyuki TAMURA, Hiroaki OZAWA, Mai OKITSU, Mizuki SUNAGAWA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

1 視察の目的

シンガポール共和国（以下、シンガポール）の小学校 Monfort Junior School ならびに Temasek Primary School の学校訪問・授業観察等を通して、日本とシンガポールの学校施設や授業方法の相違を知ること。加えて、特別支援教育の視点から校内見学や授業観察を行い、日本の特別支援教育との相違を知ることが目的とする。

2 日 程

- (1) 7月31日 日本出国
シンガポール到着
- (2) 8月1日 Monfort Junior School 訪問
 - ・学校紹介
 - ・授業観察（理科，算数）
 - ・授業観察後会議
 - ・特別支援教諭との面談
- (3) 8月2日 Monfort Junior School 訪問
 - ・授業観察（算数，保健体育，生活）
 - ・授業観察後会議
- (4) 8月3日 Temasek Primary School 訪問
 - ・学校紹介
 - ・授業観察（算数，理科，保健体育）
 - ・授業観察後会議
- (5) 8月4日 Temasek Primary School 訪問
 - ・授業観察（理科，英語）
 - ・授業観察後会議
- (6) 8月5日 シンガポール出国
- (7) 8月6日 日本帰国

3 活動内容

(1) 学校視察

Monfort Junior School, Temasek Primary School で校内見学をした。日本とは異なる教室や施設として、デンマークの玩具会社である LEGO で創作活動を行える教室（図1）、Dental clinic（図2）、売店と食堂、文房具店、環境学習ができる庭園、全面天然芝のグラウンド、児童の良い行いを紹介する廊下の掲示板（図3）、生物の成長過程を塗装した壁、教師が運動することのできるジムなどがあった。シンガポールは国土の小さい国であるため、中庭にバドミントンコートが設置されていたり、天然芝のグラウンドは隣接する中学校と共用したりするなど施設の利用方法が工夫されていた。日本の小学校に無い施設として、歯科健康診断や歯科保健指導を受けられる Dental clinic や教師が運動するためのジム、売店や文房具店が挙げられる。また、学校の壁に児童の良い行いの紹介をすること、生物の成長過程、算数の九九の問題などを掲示するなど、学校生活の中で児童が常に学ぶことができる環境設定がされていた。

特別支援教育の視点から学校設備を考えると、LEGO で創作活動を行える教室は、特別な支援が必要な児童が集中して活動を行える場所や、手先の巧緻性を高められる活動場所になると考えられる。Dental clinic の施設では、通常の学校生活の中で歯科保健指導などを行えることが大きな利益になると考えられる。山田・武蔵（2005）は、知的障害の程度が重度である場合や、自閉症や自閉傾向がみられる場合に、歯科診療に対して強い抵抗や拒否反応がみられることがあると述べている。そのため、地域の歯科医に通うことが苦手な児童でも、慣れ親しんだ学校の中で指導を受け

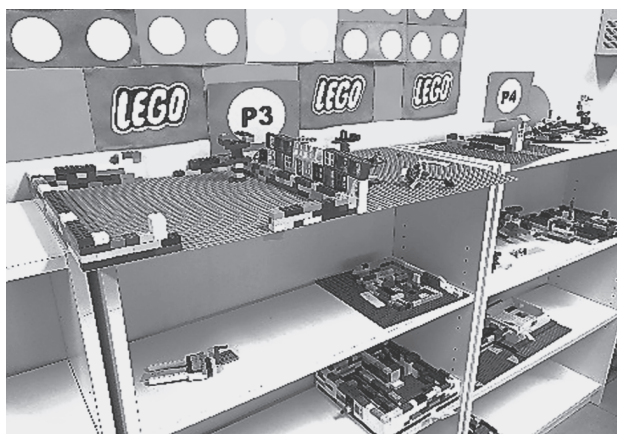


図1 LEGOで学べる教室



図2 Dental clinic



図3 児童を称賛する掲示板

られることは非常に効果的なことであると言える。売店と食堂、文房具店が学校に併設されている点に関しては、買い物学習を毎日行うことのできる環境と言える。梶山ら（2013）は、人と話す、説明するという活動が自己肯定観の高まりに大きく寄与していると述べている。小学校低学年から昼食や学校生活に必要な文房具の購入など学校内で行える活動は、購買する力や挨拶などを交えた会話能力を獲得して、自己肯定観を高められる重要な機会となる。長澤ら（2006）は、

LD・ADHDの児童への関わり方として、「児童に役割を与えること」、「褒めること」が重要と述べている。そのため、児童の良い言動を紹介する掲示板は、全校児童・教諭に良い言動を伝えられる意義のある取組である。更に、他の児童も掲示板を見ることで、一般社会で望まれる適切な言動を学ぶことができる環境になると推測できる。

(2) 授業見学

授業見学では、理科と算数、保健体育、英語、生活の授業観察を行った。その中で、主に授業観察を行った教科が理科であったため、理科の授業観察について述べる。

Monfort Junior Schoolでは、理科の授業を2クラス観察した。最初に授業観察したクラスは小学校3年生の中で総合的に学力の高いクラスであった。児童の学習意欲は高く、教師の説明を注意して聞き、実験も積極的に行っている様子であった。授業の全体的な印象として、教師の説明時間は短く、児童の活動時間が長く、授業内の無駄な時間の無い高水準の授業だと感じた。その一方、3つの実験を1時間内で実施したことや、実験の説明などの授業展開が速く、児童全員が正確に理解できているかを振り返る時間は僅かであった。

次に観察したクラスは平均的な学力のクラスであった。最初のクラスと児童の学習意欲を比較すると、特に高いとは感じられなかった。教師の指示を常に注目して聞いているわけではなく、児童の私語も多かった。ただ、実験は興味をもって行っており、前向きに参加していた。実験道具のセンサーや記録計の取り扱い、iPadの操作の仕方など（図4）は手慣れた様子が見られ、日常的に様々な器具に触れていることが見て取れた。教師の説明は丁寧であり、授業展開は緩やかであった。最初のクラスとの授業進度の差に驚かされた。

Monfort Junior Schoolは、学力に応じたクラス編成を行っていた。学習習熟度別のクラス編成を行うことで、学習に支援が必要な児童も授業に参加し易くなる。一方で、児童が実際に授業内容を理解しているかどうかの確認が積極的には行われておらず、理解不十分のまま授業が進行されてしまうことが危惧される。

Temasek Primary Schoolで観察した理科の授業では、児童は全体的に受け身の授業態度であった。この授業では、教師の授業展開が早く、説明も早口で長かった。また、児童がワークシートのどこに回答を書けばよいのか、何をすべきかが分かっていない児童も見られ、そのような児童を見つけて助言する様子は見られなかった。

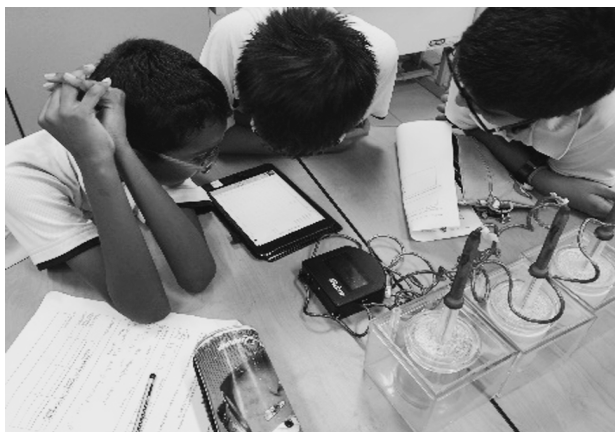


図4 実験でiPadを活用する様子



図6 膨張と縮小の実験の様子



図5 卵の温まり方の実験の様子



図7 学んだ事を児童が貼付する表

(3) 授業観察後の会議（意見交換会）

授業後の会議では、実際に授業観察をした後の率直な意見交換を行っていた。理科などでは細かな実験方法や実験の順序、小学校で行う内容と中学校で行う内容の相違など、意見交換を行うことで発見できる内容があった。そして、お互いが率直な意見交換をすることで双方にとって有益な情報を得ることができ、今後の授業改善に役立てられると言える。このようにwin-winの関係を繰り返し築いていくことが、お互いに信頼し合える連携へ続くのだと推察できる。

(4) 特別支援教諭との面談

Monfort Junior Schoolの特別支援教育を担当している教諭と面談を行った。

日本の特別支援教育と異なる点として、日本では通級指導教室や特別支援学級が通常の学校には設置されているが、訪れた2校では設置されていなかった。Monfort Junior Schoolでは、医師から診断されている支援の必要な児童数約60名に対し、AED（Allied Educator）：（Learning & Behavioral Support）（以下、AED）と呼ばれる特別支援教育を担当する教諭が2名在籍している。他校では、通常1名のみの在籍

のようである。学習支援の対応として、授業内で担当教諭が対応困難になった児童を授業から移動させ、支援する部屋で指導するということがあった。そのため、AEDの教諭は学校を巡回して、即座に対応できる体制を整えているとのことである。また、授業担当教諭が対応困難な児童に面し、AEDが近くにいない状況では、校内の電話でAEDに連絡を取りAEDが駆けつける対応になっている。現在、対応している児童の障害種として、自閉症、ディスレクシア、ADHDの児童を中心に指導しているとのことである。

日本の特別支援教育と同様である点として、支援が必要である児童の保護者、担任とは年度当初に綿密に懇談を行うことや、個別の指導計画を作成することが挙げられる。

自閉症の児童の個別の指導計画は、全てAEDの教諭が作成しているが、ディスレクシアの指導計画は、シンガポール教育省MOE（Ministry of Education）（以下、MOE）が作成しているとのことである。そのため、AEDの教諭は個別の指導計画を作成した後、MOEにe-mailで指導計画を送り確認をしているとのことであった。面談を行うことで、MOEが率先して特別支援教育全体に関与していることが分かった。

4 気づき・学び

Temasek Primary School の理科の授業では、口頭の指示が多く授業の進行速度も速かったため、言語理解が得意でない児童や、集中し続けることが得意でない児童には苦しい授業になることが予想される。

Monfort Junior School の2回目の理科の授業観察と Temasek Primary School の理科の授業観察から、平均的な学力のクラスの授業の場合、口頭だけの指示では児童は集中力を持続することが難しいことが見て取れた。視覚的に提示できる素材（パワーポイントや写真、ポスター等）を活用する状況では児童の注意が得られていたため、視覚的な支援や素材を活用することの有用性を確認することができた。授業を口頭指示のみでなく視覚的に確認でき、授業中にも指示内容を生徒自身で確認できるような環境設定をすることが、生徒の授業理解度の深化につながると考えられる。また、実験等の待ち時間ができる度に児童の私語は増えていたため、児童が常に活動する環境設定をすることも、児童の適切な言動を増やす重要なことであると感じた。

両校の共通点として、授業は事前の準備が正確に行われていた。全ての理科の授業では実験が複数行われており、準備物や授業展開について熟知していなければ授業を1時間以内に完遂することは難しい内容だと感じた。その中で、T2（授業準備を行う職員）との連携は見事であった。授業内に、T2のように授業に入っていた職員は、実験準備等を専属に行う担当者で、実験準備等全てを行うということであった。新しい実験では事前に授業者と打ち合わせをするが、本授業で担当していたT2の職員は何年も専属で準備を行っているため、打ち合わせに多くの時間を要することはないということである。そのため、授業者は授業準備に時間を取られる必要がなく授業に専念できるとのことであった。この仕組は、教師が授業に集中できる環境設定であると感じた。このT2の職員は教諭でないため授業を行うことはできないが、ティームティーチングの視点から考えると、このT2の職員が児童の学習補助に関われないことは非合理的である。児童に関わることができれば、クラス全体の学習習熟度は高まり児童もより意欲的に授業に参画できる環境を作ることができると予測できる。

学校視察・授業観察を行う前は、シンガポールは国

を挙げて教育を重視し、子ども達は受験や学力向上のために幼い頃から勉強に励むイメージがあった。子供たちは受験戦争のような環境に自然と身を置かなければならないと考えていたが、実際にシンガポールの小学校に訪問してみるとその考え方は一変した。意欲的に学んでいる児童が多く、学校に通うこと自体を楽しんでいるように見てとれた。クラス編成は学力別で構成されており、学力に応じた授業方法が行われていた。この学力別のクラス編成は、学力の高低でただ分割しているのではなく、学力の近いグループを集めることにより、より学びやすい環境を作り、理解が進むように配慮がされていると感じた。そのため、学力の高い児童は高度な教師の要求に応え、更に深い学びを得ることができ、学力の高くない児童は時間をかけて学ぶ機会が与えられている様子であった。

特別支援教育に関して、約60名の支援の必要な児童に対してAEDは2名のみである。この体制では、複数の学年で複数の児童が対応に迫られる状況では十分ではないことが推測できる。シンガポールでは、スペシャル・ニーズをもつ児童へより専門性が高い教員が指導できるよう、トレーニングコースの開発、改良に取り組んできている（発達障害辞典、2016）が、通常学校で、AEDのより多くの配置が必要になっていることが現状ではないかと考えられる。

引用文献

- 1) 一般社団法人日本LD学会 (2016). シンガポールにおける発達障害, 発達障害辞典 p590-591.
- 2) 山田教子・武蔵博文 (2005). 「自閉症児の歯科診療における支援の在り方に関する研究－歯科診療用サポートブックの作成と評価－」, 富山大学教育実践総合センター紀要 No6: 43-57
- 3) 梶山雅司 他 (2013). 知的障害のある児童生徒の自己肯定観を育む授業作り－小学校・中学校特別支援学級における体系的な授業モデルの開発(2)－, 広島大学 学部・附属学校協働研究機構研究紀要(第41号 2013.3)
- 4) 長澤正樹・増澤菜生・松岡勝彦・細井恵美・沼田夏子 (2006). LD・ADHD <ひとりでもできる力>を育てる指導・支援・個別教育計画作成の十台, 川島書店